

池田満寿夫《化粧する女》1964年 不忍画廊蔵

Topics

新年度を迎えて

池田満寿夫 — 知られざる全貌展

満寿夫・マスオ・MASUO — 『池田満寿夫』理解のための三章—

新年度を迎えて

3月から4月にかけて、日本列島を南から北に、桜前線が駆け上がっていきます。美しく、清らかな花を朗らかに咲かせて人々の心を酔わせながら、いさぎよく散って名残を惜しませる桜の花は、日本の国柄を代表する花として親しまれています。新しい年度を4月から始める我が国の制度は世界の趨勢と折り合いが悪い場合もあり、時おり改正の論議が起こりますが、いつの間にか沙汰済みになる一つの要因に、新年度の発足を桜の開花時期に合わせたいという気持ちが多くの人にあるからようです。

平成もすでに20年目を迎えたこの記念すべき年度に、当美術館としては、企画展と所蔵品展(美術館所蔵品に加えて個人や団体からお預かりしている寄託品も含めて展示します)とを密接に関連づけ、たがいに共鳴しあうように、一年間の展示計画を立てました。来館の皆様、より深く、より広い美術鑑賞の醍醐味を味わっていただきたいという願いから、次のような編成を試みてみました。

・4月5日(土)―5月18日(日)

■企画展「池田満寿夫―知られざる全貌」

□所蔵品展「満寿夫・マスオ・MASUO

―『池田満寿夫』理解のための三章―」

・6月3日(火)―7月21日(月・祝)

■企画展「インドネシア更紗のすべて―伝統と融合の芸術」

□所蔵品展「手仕事の美」

・7月29日(火)―9月7日(日)

■企画展「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」

□所蔵品展「現代美術の夏休み」

・9月13日(土)―10月26日(日)

■企画展「八犬伝の世界」

□所蔵品展「ナンバーズ・数をめぐって」

・11月1日(土)―12月14日(日)

■企画展「20世紀の写真」



「牧谿・雪舟と和漢の水墨画」展より 雪舟等楊《傲玉湖山水図》
室町時代 岡山県立美術館蔵 重要文化財



「八犬伝の世界」展より 歌川国芳《八犬伝之内芳流閣》天保11(1840)年

・12月20日(土)―1月25日(日)

■企画展「牧谿・雪舟と和漢の水墨画

―岡山県立美術館所蔵水墨画名品展」

□所蔵品展「カラーズ・色彩のよろこび」

・2月3日(火)―3月1日(日)

□所蔵品展「新収蔵作品展―写楽、夢二、そして房総ゆかりの作家たち」

・3月7日(土)―3月27日(金)

■「第40回千葉市民美術展覧会」

展覧会名称にはいまだ仮称のものもありますが、企画展と所蔵品展との間にどのような関連付けをしようと意図しているかご想像、ご賢察の上で、古今東西の、また様々なジャンルの美術を、年間を通じてお楽しみいただければ幸いです。

[館長 小林忠]



「ブラティスラヴァ世界絵本原画展」より
第21回グランプリ受賞作品 ©Einar Turkowski



池田満寿夫

IKEDA MASUO Revealed : A Retrospective

知られざる全貌展

のっけから私事で恐縮ですが、私は、美術館の学芸員であり、美術史上の専門分野は浮世絵です。そのせいか、浮世絵の中で最も好きな人は誰ですか、とか、最も好きな作品は何ですかという質問をよく受けます。そんな時、私は、多少の違和感と戸惑いを覚えます。専門が浮世絵だから、美術作品のなかで浮世絵が一番好きであるに違いない、という大前提で質問していることを感じるからです。私は、浮世絵が嫌いではありません。しかし、他の分野のどんな作品よりも好きだ、というわけではありません。ギリシャ・ローマの彫刻も、ルネサンスの作品も、印象派の油絵も、近代日本画も大好きです。なんど見ても飽きない仏像も数多くあります。嗜好は相当広範囲に及びますが、それらの全部に言及する力量がないので、浮世絵を選択して自身の専門としているにすぎません。

美術の作家、いわゆるアーティストも概ね、自身の表現世界を限定しています。あれもこれも到底無理であると考えているからです。ところが、ごく稀に、あれもこれもやる人がいます。その一人が池田満寿夫です。池田は、正直な人なんだと思います。浮気性というふうに捉えることもできますが、今までのやり方、作風に飽きたから変えてみよう、陶芸も面白そうだからやってみようと考え、行動することが悪いということはないと思います。ただ、普通の人は、いろいろ手を出して、うまくいくのだろうか、いい作品なんか簡単に作れないのではなかろうかと考えてしまうのです。池田は、あまりそういう風に考えない人なんだろうと思います。考えるにしても、手を出す魅力の方が勝ってしまうのかもしれない。この展覧会は、そういった池田の多様な活動をできるだけ紹介し、味わってもらい、批評していただくということで企画されたものです。画家、挿絵家、彫刻家、陶芸作家、小説家、エッセイスト、浮世絵研究家、脚本家、写真家、書家、映画監督.....といった多彩な池田の全部を展示することはさすがに無理ですが、油彩、版画、水彩、コラージュ、陶芸・ブロンズ、書の作品200点余りを展示します。

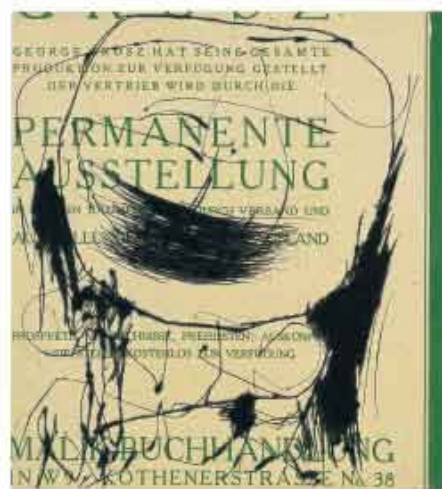
池田の創作活動のなかで一分野だけを取り上げるとすれば、版画ということになるのは当然のことでしょう。私も、つまるところ、池田は版画家であると思います。今回の出品作品も、版画が半数近くを占めますが、池田の版画作品は、1000点を超えますから、その10分の1以下にすぎません。ただし、評価の高い初期の受賞作品はほとんど網羅しているので、密度は濃いと思います。《女・動物たち》(1960)、《女の肖像》(1960)は、完成した版画作品とともに、ドライポイントの墨版だけのものに彩色部分を筆で表わした、完成途上の作品も参考に出品するので、比較することができます。また、《ムーン・フェイス》(1961)は、ドイツの古雑誌の上に刷った作品ですが、3種のコレクションを展示します。コラージュの版画は、どの雑誌のどのページを使うかによって背景が異なるので、当然、印象も異なります。池田が、その妙を楽しんでいたのは確かであると思います。池田は、無秩序に背景の雑誌を選んでいただけではなく、《ムーン・フェイス》は、インクが緑色の特定の雑誌ばかりに刷ったよう



《佛塔14》1994年 陶 パラミタミュージアム蔵



《女・動物たち》1960年 ドライポイント・アクアチント、紙 不忍画廊蔵



《ムーン・フェイス》1961年 ドライポイント・コラージュ、紙

です。奔放な中に思慮あり、といったところでしょうか。

池田は、1956年、22歳の時に初めて版画を制作し、それ以後は、主として版画家として活動するのですが、それまでは、油彩を描いていましたし、版画で有名になったあとも、油彩を放棄したわけではなく、相当に未練があり、折にふれて描いていたようです。この展覧会では、初期から絶筆までの17点に、最初の会場である東京オペラシティアートギャラリーでの展覧会が始まってから確認された参考出品2点の計19点を展示いたします。そのうち、《作品》(1950年代初め)、《裸婦1》《裸婦2》(1997、絶筆、未完)と、参考出品の《我が家》(1949-50頃、高校生時代)、《骨を持つ人》(1954)は、今回初めて展示される作品です。

最後に、池田の陶の作品について述べようと思います。池田が、陶の作品を初めて作ったのは、1983年、49歳の時です。それ以降、亡くなる年まで作ったのは3000点といえますから、版画よりも多いということになります。池田は、1993年に、山梨県増穂町に八方窯という、薪を四方八方から投入できる窯を築きました。池田の作陶が本格化するの、それ以降です。1993年の古代幻視シリーズ、陶の代表作といわれる1994年の般若心経シリーズ、亡くなる直前1997年の土の迷宮シリーズを見ると、「私の陶芸は版画のコピーではない」という池田の言葉は素直に肯かれるものがあります。陶を陶として扱い、その原始的な、根源的な神秘にひかれた池田が何を表現したのか、したかったのか分かるような気がいたします。版画に匹敵する約80点の作品を展示しますので、どうか、心ゆくまで池田の陶を味わってください。

[前学芸課長 浅野秀剛]



《心経碗》 1994年 陶 (全117点のうち)



《裸のエマ》 1971年 メソチント・エッチング・ドライポイント、紙

関連イベント

■ 佐藤陽子トーク&ミニコンサート

4月19日(土) 14:00より(開場は30分前)

出演: 佐藤陽子

会場: 1階さや堂ホール

* 入場無料/展覧会チケット(招待券不可)の半券をご提示ください。

* お申し込みは往復はがきに、イベント名(日時も)、氏名、住所、電話番号、参加人数(1申込みに付き2名まで)を明記の上、〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8 千葉市美術館 池田展イベント係までお送りください。

* 締め切りは4月10日(当日消印有効)/定員150名

■ 記念講演会・対談

4月29日(火・祝) 14:00より

第一部「池田満寿夫の誕生と成功」黒川公二(佐倉市立美術館学芸員)

第二部「『版画友の会』と池田満寿夫」

魚津章夫(元プリントアートセンター代表)

対談「池田満寿夫の版画を語る」黒川公二・魚津章夫

会場: 11階講堂 入場無料/先着150名

■ 映画上映会

「美しさと哀しみと」(篠田正浩監督)

4月20日(日)、5月3日(土・祝) 14:00より

会場: 11階講堂 入場無料/先着150名

池田満寿夫 — 知られざる全貌展

2008年4月5日(土)▷5月18日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

* 入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 4月7日(月)、5月7日(水)

[観覧料] 一般 800(640)円

高校・大学生 560(450)円

小・中学生 無料

* ()内は団体30人以上・前売料金および市内在住60歳以上

* 前売券は、千葉都市モノレール「千葉駅」「千葉みなと駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(5月18日まで)にて販売

満寿夫・マスオ・MASUO

—『池田満寿夫』理解のための三章—

今回の所蔵作品展「満寿夫・マスオ・MASUO—『池田満寿夫』理解のための三章—」は、「池田満寿夫—知られざる全貌展」開催にあわせ、当館が所蔵する現代美術作品のなかから、池田満寿夫(1934-97)の活動に関連する作品を、3つのコーナーに展示いたします。

1. 「満寿夫」の章—デモクラート美術家協会

池田満寿夫が外(の世界)に向かって作品を発表しはじめるのは1950年、16歳からです。その後、受験の失敗や団体展への出品、生活の糧を得るためにアルバイトをする一方で制作に打ち込むという、現在では想像できないほど濃密で、ひりつくような日々を送っていました。そのなかで彼は55年、鬚嘔(1931生)たちと若者4人によるグループ「実在者」を結成します(メンバー以外に客員として写真家の奈良原一高が参加)。

グループ「実在者」は1956年には活動を終了しましたが、この間、池田は鬚嘔の紹介で埼玉・浦和に住んでいた瑛九(1911-60)を初めて訪問しました。瑛九は1930年代から美術の世界で活躍し、油絵や写真を用いたフォトデッサンなどの実験的な美術作品のほか、評論活動で知られた前衛芸術家でした。池田が訪問した当時は「デモクラート美術家協会」の中心的な存在として活動していました。この協会の名称は、彼が戦前から学んでいたエスペラント語で「民主主義」を意味しています。協会の活動は1951年から57年まで続き、のべ56人の参加者たちが絵画にとどまることなく、さまざまなジャンルにわたり、まさに自由と独立の精神による創作活動を目指しました。池田はグループ「実在者」の解消後の56年、協会の活動末期に参加しています。メンバーとしての活動期間は短いながらも、彼はこの会で瑛九から色彩銅版画の制作をすすめられ、決定的な影響を受けました。

このコーナーでは、参加メンバーたちの中から、前述の鬚嘔のほか、利根山光人(1921-94)、加藤正(1926生)、吉原英雄(1931-2007)、磯辺行久(1936生)などの作品を紹介します。

2. 「マスオ」の章—詩画集『あんま—愛慾を支える劇場の話』

1960年代、舞踏家・土方巽(1928-86)の周囲にはたくさんの芸術家が集まり、舞踏公演の際にはポスターや衣装、プログラムなどに協力しました。

土方は現在国際的な言葉となった「暗黒舞踏」という言葉を1960年代前半に初めて用いた人物です。彼は日本人の体を西洋の価値観にむりやり合わせるのではなく、体それ自身が発する何ものかを追求しようとした希有な存在でした。

池田満寿夫と土方の交流は1963年に始まり、この年東京の草月ホールで開催された土方の「土方巽 DANCE EXPERIENCEの会・あ



鬚嘔《若い仲間たち》1955年



磯辺行久《Work 62-15》1962年



加藤正《赤道祭》1955年 サトウ画廊コレクション

んまー愛慾を支える劇場の話」のために銅版画や公演プログラムを制作しています。その5年後の68年、土方の舞踏生活10周年と「土方巽と日本人―肉体の叛乱」上演を記念して、詩画集『あんまー愛慾を支える劇場の話』が池田を含めた複数の芸術家たちによって共同で制作されました。

参加者は瀧口修造(1903-79)、吉岡実(1919-90)、三好豊一郎(1920-92)、澁澤龍彦(1928-87)、加藤郁乎(1929生)、飯島耕一(1930生)という6人の詩を中心とする文学者。そして池田、中村宏(1932生)、加納光於(1933生)、中西夏之(1935生)、三木富雄(1937-78)、野中ユリ(1938生)の6人の造形作家。彼らの作品をデザイナーの田中一光(1930-2002)が編集・装幀しています。このコーナーでは詩画集『あんまー愛慾を支える劇場の話』全点の他、中村、加納、中西、三木の作品や瀧口の素描などをご紹介します。

3. “MASUO”の章―マルセル・デュシャンの銅版画集『恋人たち』

池田満寿夫の版画作品には女性や愛がテーマとなっている作品が多いことはよく知られています。また、作品の内容ばかりではなく、その制作点数の多さや多方面にわたる精力的な活動は20世紀美術の巨匠であるパブロ・ピカソ(1881-1973)を連想させるところがあります。

ところで、20世紀の美術のなかに、このようなピカソ的なタイプの対極、正反対に位置するアーティストの代表的な存在として、マルセル・デュシャン(1887-1968)がいます。寡作、難解な彼の活動とその作品はしばしば「現代美術の源流」と呼ばれていますが、彼が亡くなる直前の1967年から68年にかけて、ピカソや池田が多くの作品のテーマとした「恋人たちの交歓」による連作版画を制作しています。このコーナーでは池田の表現について考えるために、デュシャンの銅版画集『恋人たち』を中心に展示します。

デュシャンの作品は線によって人のすがたが描かれていながら、肉体の重さや動きはほとんど感じられず、恋人たちの息づかいも聞こえてきません。見る側がおそらく「感じたい」と願っているさまざまのことを作者は慎重に取り除いています。それは、描かれた人体像がモデルなどではなく、ルーカス・クラナッハ(1472-1553)、ドミニク・アングル(1780-1867)、ギュスターヴ・クールベ(1819-77)、オーギュスト・ロダン(1840-1917)たちによるヨーロッパ美術の名作や、広告写真を基にしたことが一因かもしれません。

また、銅版画集『大ガラス』は『恋人たち』に先立つ1965年に制作されました。「大ガラス」とは、デュシャンが1915年から23年にかけて実際に大きなガラスを支持体として制作した《彼女の独身者たち》によって裸にされた花嫁、さえも》の略称です。ガラスによる制作は長い時間の末に制作が放棄されてしまいましたが、版画集では作品の各部分の他に《完成された『大ガラス』》が含まれています。この版画集と『恋人たち』の関係について研究者たちがさまざまな関係を指摘しています。池田やピカソとの表現の違いを御楽しみ下さい。

[学芸係長 藁科英也]



詩画集『あんまー愛慾を支える劇場の話』1968年より
加藤郁乎「祀」 池田満寿夫《HOMMAGE A TATSUMI》



マルセル・デュシャン《愛の後(第2ステート)》1967年
© Succession Marcel Duchamp / ADAGP, Paris & SPDA, Tokyo, 2008

満寿夫・マスオ・MASUO ―『池田満寿夫』理解のための三章―

2008年4月5日(土)▷5月18日(日)

10:00 - 18:00 (金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[休館日] 4月7日(月)、5月7日(水)

[観覧料]	一般	200(160)円
	高校・大学生	150(120)円
	小・中学生	無料

* ()内は団体30人以上の料金

◎蔵書票を作ろう～本好きのための小さな世界を摺る～

企画展「日本の版画・1941-1950」にあわせて行った、多色摺木版画の摺りを体験する立ち寄りワークショップ。昨年の同じ頃、夢二デザインをモチーフにしおりや絵葉書を摺り、皆様の好評をいただいたことから、今年もまた、スタッフ一同張り切ったの店開きとなりました。

用意したのは、6種類の蔵書票。ランプ、人魚、猫…、いずれも2版以上重ねて図柄をつくります。こうやって実際に摺ってみると、版画作品のしくみやその面白さが一層身近に感じられるのではないのでしょうか。

二日目はあいにくの大雪でしたが、ちょうど館内では小中学生の作品展(総合展)を開催中ということもあって、美術館を訪れたたくさんの方が参加してくださいました。このワークショップを企画・運営した美術館ボランティアによる摺りの会では、来年は何を摺ろうか早くも思案中のようです。

(2月2日(土)、3日(日) 1階エントランス奥のスペースにて実施)



完成した蔵書票



制作にはげむ参加者たち

ボランティア日和 episode16



鳥居清長 《大川端の夕涼》 天明4(1784)年頃 シカゴ美術館蔵

初めて彼女に会ったのは、もう何年前になるのでしょうか？誰もいないほの暗い展示室。壁に居並ぶ美女たちの中で、ふと目が合ったのが彼女でした。「おやまあ、随分としけた顔をしておいでだねえ。」当時、何事ももうまくいかずもがいていた私の目に、彼女はなんと凛として、清々しくみえたことか。しばらく彼女の前に立っているうちに、「さあさ、くよくよするのはおよしよ！」とはっぱをかけられ、背中を押されるように、その場を後にしたのを覚えています。

彼女の正体は、鳥居清長の錦絵《大川端の夕涼》の画中左、真ん中で団扇を持ってすっと立つ美女。勝手に名づけて「お清ちゃん」です。

あれから何年か経ち、再び彼女と相まみえたのは、ここ千葉市美術館で昨年開催された鳥居清長展でした。といっても、私が最初に出会っ

たお清ちゃんとは、正確には同一人物ではありません。(版画仕立てゆえ、彼女は複数名存在するのです)。こちらのお清ちゃんも、変わらず凛として涼やか(当然といえば当然)。でも、もう少しおきやんで、口が悪い。「ちょいと、あんた。随分老けこんだ顔して、一体どうしたのさ？」あっという間に、私の心の中に飛び込んできたのでした。会期中は、そんな彼女との会話を存分に楽しむことができました。苦手で尻込みしていたギャラリートークにチャレンジできたのも、お清ちゃんが背中を押してくれたからかもしれません。「うじうじ考えているより、やっておしまいよ！」

展示会の最終日。こみ合った展示室で、人垣を縫うようにお清ちゃんとアイコンタクト。「また、いつか逢おうね。」と、再会を誓ったのであります。とはいえ、今度彼女と会うのは、一体いつ、またどんな場所でのことになるやら。それはいずれのお清ちゃんか、はたまたまだ見ぬ彼女か？そして、私は一体どんなふうに変わっているのか？歯に衣着せぬ物言いのお清ちゃんたちから、今度こそ少しはお褒めの言葉をいただけるよう、彼女たちのようにしゃんと背筋を伸ばさなければ、と思うのであります。

作品と対話する。言葉にすると大袈裟ですが、実はそれほど難しいことではないのかもしれません。まずは、好きな作品を見つけること。そして、その作品をよくみて、もっともっと好きになること。それで準備はOKです。もしも、その助けに私たちボランティアがなれたなら、こんなに嬉しいことはないと思うのです。

[美術館ボランティア 石川佐知子]

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度は、「江戸」をテーマとして、当館スタッフが毎回わかりやすく解説します。参加は無料です。

[時 間] 14:00より(開場は30分前)

[場 所] 11階講堂

[定 員] 先着150名(入場無料)

○ 第1回 5月17日(土) 「江戸時代絵画の諸相」
[講師] 小林忠(本館館長)

○ 第2回 6月29日(日) 「近代から見た江戸」
[講師] 藁科英也(本館学芸係長)

□■□ミュージアムショップ通信□■□

7階ミュージアムショップから、おすすめのグッズをご紹介します。

□5月18日まで開催の「池田満寿夫—知られざる全貌展」では、会期限定の展覧会グッズを販売いたします。

写真のグッズ以外にも、書類や展覧会チラシをはさんだり出来るクリアファイル、おしゃれなスカーフが登場予定。池田満寿夫の多彩な作品と向き合った後は、是非ミュージアムショップ内の限定グッズをお楽しみください。(販売品変更になる場合もございます。予めご了承ください。)

□暑い夏に向けて日本美術をモチーフにした便利堂の扇子をご紹介します。

「鳥獣人物戯画」(上段左)は生き活きとした筆致が楽しく、小野竹喬「赤唐辛子」(下段右)は、白い扇面に赤が効いていて女性に人気の商品です。男性に人気があるのは仙厓の「○△□」(上段中)。禅のこころを表しているともいわれますが、図柄を見るだけでもシンプルな力強さが伝わる作品です。他にも、海外のお土産に好評な「風神雷神図」(上段右)「龍図」(下段左)がございます。母の日・父の日の贈り物としても喜ばれる一品としておすすめです。

◎ミュージアムショップでは、お客様のお手元に置いて楽しめるアートグッズを多数取り揃えております。どうぞお気軽にお立ち寄りください。



池田満寿夫展関連グッズの数々
便箋 (税込¥350) / 一筆箋 (税込¥300) / はがき (税込¥100)



便利堂の扇子 (税込2,625~3,675円)



[交通案内]

- ◎JR千葉駅東口より徒歩約15分
- ◎千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- ◎バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分
- ◎京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- ◎東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- ◎地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.ccma-net.jp>
[発行日] 2008年4月5日
[印刷] 半七写真印刷工業株式会社

 千葉市美術館
Chiba City Museum of Art